典型人物と非典型人物の印象形成に及ぼす 気分の影響

京都大学 伊藤美加^{1,2}

Mood effects on the impression formation of typical and atypical targets

Mika Itoh (Graduate School of Education, Kyoto University, Yoshida-honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501)

In this study, we investigated mood effects on impression formation of typical and atypical target persons, in an attempt to replicate the findings reported by Forgas (1992a). Listening to a particular piece of music, participants were first induced into positive, negative, or neutral mood. Then, they read statements, in which typical and atypical targets were described with positive and negative personality traits. While reading the statements, they were asked to form an impression of the target, and evaluate him/her. After the impression formation task, they were given ten minutes for an incidental free recall test. Results showed that mood congruent memory effect was found regardless of the targets. On the contrary, mood congruent judgment effect in positive mood was found only for typical targets. It was suggested that mood effects depend on the kind of information processing strategies triggered by typical and atypical targets.

Key words: mood-congruency effect, systematic, heuristic, affect priming, affect as information.

感情が認知に及ぼす影響の一つに、特定の気分のときにその気分と一致する感情価をもつ刺激の認知が促進されやすいという、気分一致効果 (mood-congruency effect; e.g., Bower, 1981) がある。

記憶研究における気分一致効果 (以下気分一致記憶と呼ぶ) は、特定の気分と一致した情報が符号化あるいは検索されやすいことを指す。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりも、好ましい内容をよく憶えていたり、楽しい出来事ばかりを想起したりする。一方、印象形成や対人評価等の社会的判断研究における気分一致効果 (以下気分一致判断と呼ぶ) は、特定の気分の方向に評価や判断が偏ることを指す。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりも、相手を肯定的に評価したりする (レビューとして、Bower & Forgas, 2000)。

この気分一致効果の生起に、認知課題の性質や状況などさまざまな要因が影響を及ぼすことが報告されている (e.g., Forgas, 1995a)。特に Forgas (1992a, b, 1993, 1995b) は、気分の効果が特定の情報処理に依

存することを一連の実験によって示した。

彼は、非典型的な人物やカップルに対する印象形成のように、より複雑な認知課題で採用されるシステムティック (systematic) 処理³ における感情の影響を検討した。例えば、Forgas (1992a) は、ビデオ視聴により被験者の気分を誘導した後、一貫した特徴をもつ典型人物と一貫しない特徴を併せ持つ非典型人物の特徴記述を読み (典型的記述の例: アンはフェミニストでウーマンリブパッチをつけている)、これらの人物に対する被験者の印象判断と記憶成績を査定した。その結果、非典型人物に対する印象判断において気分一致判断が認められた。また、典型人物よりも非典型人物の特徴記述の記憶成績が良く、特にネガティブな気分の効果がポジティブな気分の効果よりも大きかった。同様の手続きを用いた Forgas (1992b) は、典型人物よりも非典型人物の方が、特にネガティブな気分の被験者は印象形成や印象判断にかかる時間が長かったことから、非典型人物に対する印象判断ではよりシステムティック型の処理方略がとられたことを裏づけた。さらに、言語的な特徴記述だけでなく非言語的な刺激を用いた Forgas (1995b) でも、同様な結果が示

¹ 本実験実施にあたり、京都大学教育学部 宮崎真由美、野口寿一、竹中菜苗、内田智子 (以上敬称略) に協力を得ました。記して深く感謝いたします。

² 本論文作成にあたり指導いただきました、京都大学教育学研究科 吉川左紀子教授、子安増生教授、楠見孝助教授に厚く感謝いたします。

³ 実質的な、努力のいる、分析的な、精緻的な処理を、システムティック処理と呼ぶ。簡便で、表面的な、ヒューリスティック処理と区別して用いる。

され、判断対象の非典型度の高さに応じて気分が印象判断や記憶に及ぼす効果は大きくなった。

Forgas (1995a) によれば、気分一致記憶も気分一致判断も、システマティック処理方略が選択される状況で、感情プライミング (affect priming; e.g., Bower, 1981, 1991) メカニズムに従って生じる。システマティック処理方略とは、既存の知識構造に関連づけながら情報処理する精緻な方略である。この方略下である感情が喚起されると、対応する感情の概念表象が活性化し、それに連結する一致する感情価をもつ概念表象にも活性化が自動的に伝わり、それらに適合する情報が選択的に取り入れられるという。例えば、ポジティブな感情状態にある被験者は、ポジティブな概念表象が活性化されるため、ポジティブな過去経験を想起するというように、気分一致記憶が認められ、ポジティブな情報が判断で利用されるというように、気分一致判断が認められると考えられる。

しかしながら、彼の一連の実験では、対象人物の特徴記述の感情価に対する分析が行われておらず、気分一致記憶の検討がなされていないため、気分一致判断と気分一致記憶の関係について明確に論じられていないという問題点がある。そこで本研究では、対象人物の典型性と同時に対象人物の特徴記述の感情価を操作し、処理方略に応じて感情の影響過程が異なるかを検討する。具体的には、Forgas (1992a) にならい、被験者の気分を誘導した後、快/不快な特徴をもつ典型/非典型人物に対する印象形成課題を課し、気分一致記憶と気分一致判断が認められるかを実験的に検討する。

仮説

まず、典型人物よりも非典型人物に対する印象形成ではシステマティック処理が相対的に選択されやすいと考えられるので、(a) 典型人物よりも非典型人物に対する記憶成績が良いと予想される。次に、システマティック処理では、感情プライミングメカニズムに従うと考えられる。よって、典型人物よりも非典型人物において (b) 気分一致記憶と (c) 気分一致判断が認められると予想される。

予備調査 1

本実験に先立ち、印象形成課題で用いる、対象人物の特徴を記述する刺激文を作成するために行った。

対象人物として、特定の典型性をもっていると考えられる職業人物を扱うこととした。実験者 5 人が特定の職業に典型的に認められる特徴を自由に記述したものを参考に、1 人の職業人物につき 16 文を作成した。そのうち半数は社会的に望ましい快な特徴になるように、残り半数は望ましくない不快な特徴となるように作成した。各文の典型性を測るため、これらを本実験

に参加しなかった被験者 24 名に呈示し、各文についてどの程度その職業人物として典型的な記述だと思うかという典型度を 5 段階で評定させた。最終的に 8 人の職業人物 (弁護士、医者、芸術家、大学教授、スポーツマン、政治家、新聞記者、ホステス) について、典型度評定の平均値が比較的高いものを各 8 文 (快文と不快各 4 文) 計 64 文を選択した。例えば、弁護士の典型的な特徴文には“説得力のある話し方をする (快文)”，“えらそうに振舞う (不快文)” が、医者の典型的な特徴文には“清潔好きである (快文)”，“医療ミスを隠そうとする (不快文)” があった。

予備調査 2

本実験に先立ち、気分誘導課題で用いる音楽によって、期待された気分が喚起されるかを確認するために行った。

音楽による気分誘導法で用いられるクラシック音楽は、本来鑑賞目的のためか、誘導される気分が比較的弱く、被験者の好みに左右されやすいことが指摘されている (谷口, 1995)。そこで本実験では、効果音楽を使用することにした。“効果音楽大全集 (感情・心理)” から、ポジティブな気分を誘導する音楽として、明るい情景音楽、楽しい情景音楽、軽快な情景音楽の 3 曲を、ネガティブな気分を誘導する音楽として、暗い情景音楽、悲しい情景音楽、不安な情景音楽の 3 曲を選択した。

本実験に参加しなかった被験者 19 名に、1 曲ずつ 1 分間聴取させた。その後、10 尺度 (沈んだ、哀れな、明るい、楽しい、悲しい、暗い、うれしい、陽気な、好きな、嫌いな) について、音楽を聞いた被験者の感情状態の評定 (この曲を聴いてどのような感情を感じるかを 7 段階で評定) を行わせた。繰り返し全 6 曲に対して行わせた⁴。

感情状態評定値について因子分析を行った結果、好み因子 (好きな、嫌いな の 2 尺度) と感情因子 (残りの 8 尺度) との 2 因子を抽出した (α 係数 = .82 と .96)。ポジティブな情景音楽はネガティブな情景音楽よりも、感情因子評定値が高かったが ($F(5, 102) = 102.20, MSe = 0.57, p < .01$)、好み因子評定値には差がなかった。よって、ポジティブな情景音楽とネガティブな情景音楽とは、その曲を聴いて感じる感情状態が異なるが、その曲に対する好みは異なるわけではないことが確認できた。

⁴ この調査は集団で行われたため、6 曲の呈示順序は一定であった。その際、ネガティブな気分からポジティブな気分へ変化するように配慮した。暗い、悲しい、不安な、明るい、楽しい、軽快な情景音楽の順に呈示した。

方 法

デザイン

第1要因を誘導気分3（ポジティブ/ネガティブ/統制）、第2要因を対象人物2（典型/非典型）、第3要因を刺激文の感情価2（快/不快）とする3要因計画を用いた⁵。ただし第1要因のみ被験者間要因とした。

被 験 者

ポジティブな気分誘導されたポジティブ群（以下ポジ群）、ネガティブな気分誘導されたネガティブ群（ネガ群）、特定の気分を誘導されなかった統制群の3群を設定した。大学生48名を各群に16名ずつ、男女が偏らないようランダムに割り振った。そのうちポジ群2名、ネガ群1名、統制群3名を、後に述べるように気分誘導が十分でなかったため分析から除外した。分析対象としたのは、ポジ群14名、ネガ群15名、統制群13名の計42名となった。

材 料

音楽 予備調査により、ポジティブな気分を誘導する音楽として、明るい・楽しい・軽快な情景音楽の3曲を、ネガティブな気分を誘導する音楽として、暗い・悲しい・不安な情景音楽の3曲を用いた。この順番に3曲を連続して呈示できるよう、あらかじめテープに録音した。

気分評定 寺崎・古賀・岸本（1992）より、肯定的感情状態とされる活動的快・非活動的快・親和、否定的感情状態とされる抑鬱不安・倦怠・敵意の尺度から各5項目計30語を選び、気分評定用紙を作成した。

刺激文 予備調査により、8人の職業人物を記述する各8典型文（4快文と4不快文）の計64文を用いた。各人物別にブロック呈示した。8人の職業人物のうち半数は典型人物として、もう半数は非典型人物として呈示した。典型人物リストは、8典型文から構成された。非典型人物リストは、4典型文を逆の意味になるよう作成した4非典型文⁶と4典型文から構成されていた。すなわち、非典型人物リストは、典型文と非典型文が4文ずつで、それぞれ快文と不快文が2文ずつ含まれていたことになる。また、非典型人物リス

トの8刺激文のうち、どの4文を典型文または非典型文にするかを入れ替えて、典型文とした4文を非典型文に、非典型文とした4文を典型文にしたリストを用意した。被験者の半数に一方のリストを、残り半数にはもう一方のリストを割り当てた。さらに、8人の職業人物のうち、どの4人物を典型人物または非典型人物にするかを入れ替えて、典型人物に割り当てた4職業人物を非典型人物に、非典型人物に割り当てた4職業人物を典型人物にしたリストをもう一つ用意した。いずれのリストを割り当てるかは、被験者間でカウンターバランスを行った。なお、ブロックと各ブロック内の刺激文の呈示順序は被験者ごとにランダムイズを行った。

印象評定尺度 林（1978）の対人認知基本3次元と北村（1991）の特性次元を参考に、“親しみのもてない、尊敬できる—できない、信頼できる—できない、よい—わるい、すぐれた—おとった、好感の持てる—持てない、やさしい—いじわるな、思いやりのある—ない、あたたかい—つめたい、あかるい—くらい”の10両極尺度（順に尺度1から尺度10と呼ぶ）を選択した。

手 続 き

気分誘導 個別実験で行った。音楽連続聴取による気分誘導法を実施した。音楽はテープレコーダー（SHARP QT-C300）を用いて呈示した。被験者が実験室に入室すると同時に、該当する誘導気分に合わせて情景音楽をヘッドフォンより目を閉じたまま3分間聴取させた。具体的には“音楽を聴きながら課題を行ってもらいます。目を閉じて3分間ヘッドフォンから流れてくる音楽をよく聴いてください”と教示した。3分経過の合図の後、実験者は被験者に気分評定用紙を渡し、“現在以下の感情をどの程度感じていますか”と尋ね、各質問項目について7段階で評定させた。この際、各項目をランダムに並べ替えたものを2種類用意し、被験者間でカウンターバランスを行った。次に行う印象形成課題が終了するまで、被験者には音楽を連続聴取させた。なお統制群には何も音楽を聴取させず、気分評定から実験を始めた。

判断課題 刺激文による印象形成と、印象評定尺度による印象評定を実施した。刺激文と印象評定尺度は、パーソナルコンピュータ（OHTEC IDATEN PII350BX）を用いてCRT上に呈示した。まず、CRT画面中央に職業名を呈示し、その後各刺激文を1文ずつ呈示した。被験者は各職業人物に対する印象を形成しながら呈示された刺激文を読み、自己ペースで次の文に進んだ。具体的には以下のように教示した“これからこの画面にある人物を記述した文章がいくつか出てきます。後でその人物について印象を評定してもらいますので、その人物がどんな人かをよく考え

⁵ 印象評定値では気分と人物の2要因に、再生得点では3要因になった。

⁶ 意味を逆転させるために、反意語を用いるか、否定形に変えて、非典型文を作成した。同時に快・不快も逆になった。例えば、弁護士の快な典型文である“頭の回転がはやい”は、不快な非典型文“頭の回転がおそい”に、不快な典型文“堅苦しい”は、快な非典型文“堅苦しくはない”になった。こうして作成した非典型文の非典型度及び感情価をあらかじめ評定し刺激文を吟味すべきであったことは、手続き上の問題であった。

ながら読むようにして下さい。文章は1文ずつ出てきますので‘リターンキー’を押して次の文章に進んで下さい”。次に、8刺激文の呈示終了後、被験者にその人物の印象について10印象評定尺度にそれぞれ7段階で評定させた。以上を1ブロックとし、これを8ブロック繰り返した⁷。

記憶課題 判断課題終了後、気分誘導群に呈示していた音楽を止めた。被験者は、都道府県名を記入させるという1分間のフィラー課題を行った後、続いて再生用紙を用いて最長10分間の偶発自由再生を書記にて行った。再生用紙には、8職業人物の職業名と刺激文を書くための横線が書かれていた。被験者はこの職業名を手がかりに、呈示された刺激文をできるだけたくさん自由な順序で思い出すよう求められた。この際、職業名の呈示順序を並び替えた再生用紙を2種類用意し、被験者間でカウンターバランスを行った。

結 果

気分得点

気分評定値を高得点ほどその尺度を表すように数値化したものを気分得点とした。各尺度の気分得点において被験者全体の平均から $\pm 2SD$ 以上の逸脱がみられた被験者は、以下の全分析から除外した。

まず全気分得点について因子分析を行い、2因子を抽出した。活動的快・親和尺度を肯定的感情状態因子、抑鬱不安・倦怠・敵意尺度を否定的感情状態因子とし（順に α 係数=.77, .78）、各因子の平均得点を算出した。なお両因子にまたがる非活動的快尺度の気分得点は分析対象としなかった。各因子別の気分得点の平均と SD をTable 1に示す。

次に被験者の気分が誘導されていたかを確認するために、肯定的感情状態因子における気分得点について1要因分散分析を行った。その結果、主効果が有意になったので（ $F(2, 39) = 16.62$, $MSe = 0.70$, $p < .01$ ）、多重比較⁸を行ったところ、ポジ群は統制群よりも、統制群はネガ群よりも、気分得点が高かった。否定的感情状態においても同様に分析した結果、有意な効果は認められなかった（ $F(2, 39) = 1.37$, $MSe = 0.64$, ns ）。音楽によってポジティブな気分は誘導されていたとみなせるが、ネガティブな気分が誘導されていたと強くはいえないものの、3群は異なる感情状態であったとみなし、以後の分析を行った。

印象評定値

すべての印象評定尺度の評定値について因子分析を

Table 1
Mean mood scores for three mood groups
with two affective state scales

Affective state scale	Mood group		
	Positive	Control	Negative
Positive	4.60 (0.54)	3.41 (0.82)	2.82 (0.99)
Negative	2.31 (0.59)	2.70 (0.88)	2.80 (0.89)

Note: A high score (range 1—7) means that the mood was more positive or negative, respectively. Values in parenthesis are standard deviations.

行った結果、2因子を抽出した。印象評定尺度の尺度2から尺度5を社会的望ましき因子、尺度6から尺度10を個人的望ましき因子とし（順に α 係数=.68, .82）、各因子の平均評定値を算出した。なお両因子にまたがる尺度1の評定値は分析対象としなかった。各条件の印象評定値の平均と SD をTable 2に示す。

気分3（ポジ、ネガ、統制群）×人物2（典型、非典型）×因子2（社会的望ましき、個人的望ましき）の3要因分散分析の結果、因子の主効果（ $F(1, 39) = 5.08$, $MSe = 0.15$, $p < .05$ ）、気分と人物の交互作用（ $F(2, 39) = 4.21$, $MSe = 0.49$, $p < .05$ ）が有意になった。交互作用が有意になったので、各人物別に単純主効果検定を行った。典型人物で単純主効果が有意になり（ $F(2, 90) = 4.39$, $MSe = 0.62$, $p < .05$ ）、典型人物に対する印象評定値は、ポジ群で統制群やネガ群よりも高かったが、ネガ群と統制群間に有意差はなかった。これは、ポジティブな気分における気分一致判断を示す。一方、非典型人物で単純主効果は有意にならなかった（ $F(2, 78) = 0.49$, $MSe = 0.66$, ns ）。

再生得点

各刺激文の再生された程度を実験者が5段階で評定した値を再生得点として算出した⁹。高い得点ほど再生された内容が正確であることを示す。何も再生されなかった場合は0とした。各職業別に再生得点の平均を算出し、さらに各人物別に算出した平均と SD をTable 3に示す。

気分3（ポジ、ネガ、統制群）×人物2（典型、非典型）×刺激文2（快、不快）の3要因分散分析を行った結果、人物の主効果（ $F(1, 39) = 60.20$, $MSe = 0.26$, $p < .01$ ）が有意となり、典型人物よりも非典型人物の

⁷ 各刺激文を読む時間と印象評定にかかる時間を計測したが、この結果については本論文では触れない。

⁸ 以下では多重比較にRyan法を用いた。

⁹ 実験者5名のうち、4人が2人ずつペアになり、再生得点を算出した。各自で得点化し、意見が食い違う場合は、協議の上、2人の平均値を算出した。なお、実験者効果が生じないよう、残りの実験者1名が、被験者の条件が分からないよう再生用紙を分割した。

Table 2
Mean impression ratings as a function of target person and mood group,
with two rating scales and their total score

Impression rating scale	Target-person					
	Typical			Atypical		
	Mood group			Mood group		
	Positive	Control	Negative	Positive	Control	Negative
Social desirability	4.22 (.61)	3.68 (.58)	3.67 (.76)	3.75 (.57)	3.85 (.47)	4.12 (.79)
Personal desirability	4.43 (.63)	3.75 (.52)	3.89 (.74)	3.97 (.56)	3.91 (.60)	3.99 (.62)
Total	4.24 (.61)	3.72 (.52)	3.78 (.66)	3.90 (.53)	3.88 (.42)	4.05 (.66)

Note: A high score (range 1—7) means that the rating was more positive. Values in parenthesis are standard deviations.

Table 3
Mean recall scores as a function of target person, mood group, and sentence valence

Sentence valence	Target-person					
	Typical			Atypical		
	Mood group			Mood group		
	Positive	Control	Negative	Positive	Control	Negative
Pleasant	1.49 (.34)	1.34 (.61)	1.36 (.43)	2.06 (.56)	1.91 (.47)	1.76 (.68)
Unpleasant	1.19 (.44)	1.38 (.67)	1.40 (.51)	1.85 (.47)	1.92 (.73)	2.37 (.69)

Note: A high score means that the recall was more accurate. Values in parenthesis are standard deviations.

方が刺激文の再生が良かった。また、気分と刺激文の交互作用 ($F(2, 39) = 4.27, MSe = 0.26, p < .05$) が有意だったので、各刺激文別に単純主効果検定を行った。快文でも不快文でも単純主効果が有意にならず ($F(2, 78) = 0.70, MSe = 0.44, ns$; $F(2, 78) = 2.13, MSe = 0.44, ns$)、3群間に有意差は認められなかったが、快文に対する再生得点はポジ群が、不快文に対する再生得点はネガ群が最も高く、おおよそ気分一致記憶を示す全体的な結果が得られた。

考 察

再生得点の結果から、典型人物よりも非典型人物の再生成績が良く、仮説(a)は支持された。また、典型人物でも非典型人物でも対象人物にかかわらず気分の影響が認められ、仮説(b)は支持されなかった。次に印象評定値の結果から、典型人物でポジティブな気分において気分一致判断が認められたが、非典型人物では気分の影響が認められなかった。よって仮説(c)とは逆の結果が得られた。

非典型人物の印象形成では、対象人物の特徴には典型的特徴と非典型的特徴とが含まれており、被験者の既存知識に必ずしも適合しないため、個々の特徴に注

意を向けて対象人物の印象形成を行うようなシステムティック処理が行われる。そのため、非典型人物の記憶成績が良かったと考えられる。そしてこのような処理では、気分と同じ感情価をもつ概念表象が活性化され、その活性化された概念表象に関連する、対象人物の特徴が精緻化されるため、おおよそ気分一致記憶の傾向が認められたと考えられる。

しかし、非典型人物で気分一致判断が認められなかったことから、判断における気分の影響は、気分一致情報の選択的精緻化のみに依拠するのではないことが示唆される。気分によって活性化された概念表象を利用して判断するというよりも、現在の状況や文脈に合わせて判断した可能性が考えられる。一つには、Forgas (1992a) と異なり、本研究では気分誘導課題と印象形成課題とを別の実験と称して行わなかったため、被験者は自分の気分状態を意識しやすかった。判断に及ぼすバイアスを認識している場合、そのバイアスから回避するような処理を行うため (Wegner & Petty, 1995)、気分の影響を修正 (correction) するような過程が働いたのではないだろうか¹⁰。判断課題は記憶課

¹⁰ この解釈を指摘いただいた審査者の先生に感謝いたします。

題に比べ、この修正過程による影響を反映しやすかったのだろう。

他方、典型人物の印象形成で気分の影響が認められたことから、別のメカニズムによる感情の影響の可能性が示唆される。対象人物の典型的特徴は被験者の既存知識に適合するため、既存知識のみに依存して対象人物の判断を行うようなヒューリスティック処理が行われる。ヒューリスティック処理とは、利用できる情報の一部に注目して直観的に処理する方略である。この方略が採用される状況では、感情の影響は感情情報(affect as information)メカニズム(e.g., Schwarz & Clore, 1996)に従い、判断の手がかりとして感情状態を利用するという。例えば、ポジティブな感情状態にある被験者は、自分のポジティブな感情の原因を誤って判断対象に帰属させ、その人物がポジティブな特性をもつとみなすというように気分一致記憶の傾向が、ポジティブな評価を与えるというように気分一致判断が認められると考えられる。

気分一致判断がポジティブな気分により認められたのは、一つには、ネガティブな気分の誘導が弱く、ネガティブな気分の影響を検出できなかった可能性がある。もう一つの可能性として、典型人物判断で用いられるヒューリスティック処理は、ポジティブな気分が促進するヒューリスティック処理と加算的に働いたが、ネガティブな気分が促進するシステムティック処理と干渉したため、ポジティブな気分の影響のみが認められたと考えられる。

しかしながら、本実験結果は先行研究の一連の結果と食い違いがあるため、上述のように典型人物と非典型人物判断で異なる情報処理方略が用いられたか、感情の影響過程が異なるかについて、実験方法を洗練させた上で、今後更に実証的研究の蓄積が必要であるといえよう。

引用文献

- Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, **36**, 129-148.
- Bower, G. H. 1991 Mood congruity of social judgments. In J. P. Forgas(Ed.), *Emotion and social judgments*. Oxford: Pergamon Press. Pp. 31-54.
- Bower, G. H., & Forgas, J. P. 2000 Affect, memory, and social cognition. In E. Eich, G. H. Bower, J. P. Forgas, & P. M. Niedenthal(Eds.), *Cognition and emotion*. New York: Oxford University Press. Pp. 87-168.
- Forgas, J. P. 1992a Mood and the perception of unusual people: Affective asymmetry in memory and social judgements. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 531-547.
- Forgas, J. P. 1992b On mood and peculiar people: Affect and person typicality in impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 863-875.
- Forgas, J. P. 1993 On making sense of odd couples: Mood effects on the perception of mismatched relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 59-70.
- Forgas, J. P. 1995a Mood and judgement: The affect infusion model(AIM). *Psychological Bulletin*, **117**, 39-66.
- Forgas, J. P. 1995b Strange couples: Mood effects on judgments and memory about prototypical and atypical relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 747-765.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 233-247.
- (Hayashi, H. 1978 The fundamental dimension of interpersonal cognitive structure. *Bulletin of the Faculty of Education, The Department of Educational Psychology, Nagoya University*, **25**, 233-247.)
- 北村英哉 1991 特性概念の可得性と自己スキーマが対人記憶に及ぼす効果 心理学研究, **62**, 221-228.
- (Kitamura, H. 1991 Effects of construct accessibility and self-schema on person memory. *Japanese Journal of Psychology*, **62**, 221-228.)
- Schwarz, N., & Clore, G. L. 1996 Feelings and phenomenal experiences. In E. T. Higgins & A. Kruglanski(Eds.), *Social psychology: A handbook of basic principles*. New York: Guilford Press. Pp. 433-465.
- 谷口高士 1995 音楽の感情価と聴取者の感情的反応に関する認知心理学的研究 京都大学大学院教育学研究科博士論文(未公開).
- (Taniguchi, T. 1995 *A study of cognitive psychology about affective value of music and affective response of listener*. Unpublished doctoral dissertation, University of Kyoto, Japan.)
- 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- (Terasaki, S., Koga, A., & Kishimoto, Y. 1992 Construction of a multiple mood scale. *Japanese Journal of Psychology*, **62**, 350-356.)
- Wegner, D. T., & Petty, R. E. 1995 Flexible correction processes in social judgment: The role of naive theories in corrections for perceived bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 36-51.

—2000. 12. 4 受稿, 2002. 5. 11 受理—